

チベット、その明晰さが

頭痛は次第にひどくなり、身体はだるい。ヤクホテルの六人部屋のベッドに横たわり、僕はもう眠ってしまおうとするのだけれども、眠れない。同じ姿勢で横たわっていることさえもつらく、またいたたまれないような感じなのだ。頭痛もつらいが、普段は当たり前で意識もしないような身体が存在がいたたまれないという感覚はもつとつらい。眠りを捉えるためにじつと横たわっていることにも耐えられず、僕は幾度となく寝返りを繰り返すのだった。

いつもの夜ならば、この中国に足を踏み入れて以来の習性になっていた啤酒を飲んで、そのまま酔いに運ばれるようにして眠ってしまうのだけれども、せっかくなさつき買い込んできた啤酒も飲む気にはならない。

僕はガイドブックに掲載されていた『高山病に注意』という文章を思い出す。だが結局は「無理な我慢は禁物。無理はしないこと」ということにつぎなのだ。成都の空港で売っていた簡易型の酸素補給器を買っていれば、とも思い、少しは悔いたのだけれども、酸素は対処療法にはなっても解決にはならない。ただ身体が標高三六五〇メートルのラサの希薄な酸素に慣れるのを待つしかないのだ。ガイドブックの注意によると、一日日よりも二日目、三日目にひどくなるなどと書いてあるので、僕は不安になる。ベッドに横たわったまま深呼吸を繰り返すのだった。そしていたたまれずにまた寝返りをうつ。

眠れないまままた寝返りをうち、僕はラサ空港に降り立ったときの感覚を思い出す。まるで絵のように青く、くつきりとした空。そして白い雲。そしてラサ市内に至るまでの草木の一本も生えてはいない黄土色の山並。あらゆる存在が明晰で、くつきりと輪郭をきわだたせていた。それは不思議な感覚だった。ことさらに聖地とか、チベット仏教とかを持ち出すまでもない直接的な感覚。一日中どんよりとした厚い雲におおわれ、埃や砂塵が立ちこめているような成都から来たからかもしれないが、この明晰さには耐えられないという気がしたのだった。意識がではなく、意識も身体も貫いて、僕という存在のあいまいさ、ある種の不純さが、その明晰さには耐えられないと直観していた。そして僕はふと思いつくのだ。もしかしたらこの頭痛、この身体のいたたまれなさは、あの明晰さが僕に適応を強いているのかもしれない。

※

ほぼ定刻に成都の空港を離陸した飛行機は二時間ほどでラサ（クンガ）空港に到着した。

座席が窓からは離れていたこともあって、途中の景色はほとんど見ることができなかつたのだけれども、機体がラサに近づき高度を下げるに従って、乗客の肩越しにときおり見える下界の景色は、とにかくすごかつた。樹木の一本も生えてはいない荒涼とした黄土色の大地はけわしく、また厳しく人間の侵入を拒絶しているかのようだった。鋭角の峰、そして水のない深い谷。微かに緑がかつた黄土色の大地のうねり。

機体がラサ空港に着陸し、タラップを下りたときに感じたのは日差しが強さ。あたりには何もなく、ただ滑走路だけ。その向こうは青い絵の具を塗つたようなくっきりとした空。そして一点の緑もない黄土色の岩山。僕は微かに胸苦しさを感じた。おそらく空気が薄いということも原因ではあつただろうけれども、あまりに何もない景色に幻惑を覚えたのだった。感覚として、生理として理解不可能な景色だったのだ。

とんでもない所まで来てしまったと感じながら、他の旅客たちとともにターミナルビルならぬ售票処の建物の陰で荷物の到着を待っていた。

やがてダンブカーのようなトラックに一杯の荷物が到着した。職員の間たちが荷台に上つて、次々に荷物を下ろしていく。旅客たちはトラックに群がり、自分の荷物を求めて手を出したり、声を出したり。僕ももちろん旅客たちとともに自分の荷物を捜すのだけれども、なかなか見つからない。トラックの荷物の半分以上は貨物で、僕には関係がない。

「えー？ 荷物がない！」とパニックになりかけたが、荷はもちらんトラック一台分だけではなくて、トラックはピストン運転で何度も機体と售票処前を往復するのだった。

ようやく自分の荷物を発見し、それを担いで售票処で空港バスのチケットを買ひ（九・八元）、ほぼ満席の空港バスに乗り込んだ。バスはヤルツァンポ河というこれまた絵のようにくっきりとした透明感のある流れを運ぶ河沿いに走っていく。河の向こうも、反対側も黄土色の岩山。

ラサ市街まではほんのしばらくだろうと思っていたのだけれども、いつまでたつても岩山。ときおり平屋根に白壁の民家が目に入る。民家の屋根にはタルチョと呼ばれる色とりどりの祈りの旗がたなびいている。

バスはやがてヤルツァンポ河の支流、キチュ河沿いに進んで行く。いくつかの集落を通り過ぎ、ラサ市街に近づくにつれて、道路には黒い民族衣裳に身を包んだチベット人たちのグループが歩いているのが目についた。数人から十数人のグループ。そのようなグループが「はて？」と思ひながら見ていると、続々と歩いている。ふと、小高い岩山に目をやると、山の中腹や山頂あたりにはチベット人の男や若者たちが点々とへばりついて

いる。

なんとも不思議な光景だったけれども、疑問を解くこともできないままにバスはラサ市街に入り、やがて小さなバスターミナルのような広場に到着した。空港からは結局一時間半もかかったのだった。

同乗の旅客たちはあつというまにいらなくなって、心細い思いでバッグを肩にして広場から通りに出てみたが、ここがどこなのか僕には分からない。ガイドブックにはラサの簡単な市街地図が載っているのだけれども、自分がいまだどこにいるのか見当もつかない。仕方がないので、当てずっぽうで目算を立てた方向に通りを歩き始めた。

重い荷物を肩にして歩き始めると、やけにしんどいのがあった。少し動悸もするような感じで、確かではない道をどんどん行くということもできない。立ち止まり、もう一度地図を確かめ、あたりを見まわした。ぐるっと見まわし、ふと視線を上にあげると、思いがけなくもはるかな高みに、巨大なポタラは記憶通りの姿でそびえていたのだった。

「あつ！」と僕は声にならない叫びをあげていた。

想像していた以上に巨大で勇壮なポタラ宮の姿を目にして、一瞬あつけにとられて立ちつくしたのだけれども、すぐに僕は我に帰る。早くヤクホテル（昆明で香港人から教えられたホテル）を捜さなければと思ったのだ。おそらく酸素が薄いためだろうけれども何か息苦しくて、重い荷物を肩にしてしばらく歩いて、とてもしんどく感じたのだ。早く自分の場所を確保して、ゆつくりとしたかった。

ポタラとの位置関係でだいたい現在の位置というのは分かったのだけれども、ヤクホテルまではかなりの距離があるようだった。バスターミナルの付近に何台かのリキシヤが停車してあったのを思い出し、戻っていた。

リキシヤの近くで暇そうにしていた男に、

「ヤクホテル」

と告げるが、伝わらない。中国語でどのように言えばいいのか分からないくて

「ヤク・ファンテン（飯店）、ファンテン！」

と繰り返すと、分かったのかどうか、乗れというしぐさ。本当に行き先が伝わったのかどうか確信がもてなかったので不安だったけれども、リキシヤは一キロメートルほど走って、セクホテルに到着した。

ヤクホテルは、立派な門構えの入口を入っていくとこじんまりとした中庭があり、それを囲うようにして二階建てのチベット風の白壁の建物が建てられている。六人部屋は一泊二六元。ベッドに腰を下ろして、お茶を飲みながらゆつくりとした。たまたま物入れの引き出しの中に前に宿

泊した日本人旅行者が残っていたのだらうチベットのガイドブックがあつたので、情報を仕入れた。

ヤクホテルのある北京路はラサ市街をほぼ東西に横断するメインストリートで、チベットらしくタルチョ風の彩りで飾りつけたリキシャや自転車、オートバイで賑わっているが、自動車は少ない。ヤクホテルから北京路を南に横断し、そのまま曲がりくねった小道を南の方に歩いていくと、大昭寺（チヨカン）とそれを囲うようにして八角街（バルコル）と呼ばれる賑やかな通りがある。

ホテルのベッドでしばらく休憩したあと、チヨカンの方に向かって歩いた。途中に少し大きな商店があつたので、パイナップルのビン詰めを買った。中国人たちのようにビン詰めガラス容器をお茶入れに使う魂胆なのだ。（このお茶入れは旅の後半を親しく共にすることになる。）

商店の前には、大きなチーズのような黄色い塊を置いて計り売りするチベット人の女性。また階段脇でナンのような食べ物を売る男。

八角街に近づくにつれ、それまでなんとなく感じていたラサの匂いが強烈になってくる。大昭寺正門前などで焼かれる香木の匂いなのだ。それは薄い煙のように大昭寺や八角街のあたりに立ちこめている。

八角街はまるでお祭りのような賑わいだった。数メートル幅の石畳の通りの両側にはぎっしりと露店が立ち並び、様々なチベットの日用品、お土産、仏具などを売っている。トルコ石やサンゴ、銀細工の首飾りや腕輪、大小様々なマニ車や様々な仏具、笛やシンバルのような楽器。あるいはチベット仏教に独特の仏画。様々な色合いの布。あるいは骨董品らしき品々。立ち並ぶ露店の間を、巡礼者らしき人々や観光客、あるいはラサ市民が入り混じって、一方通行で進んでいく。（八角街は中心の大昭寺を右手にして一方通行でまわるようになっていくらしい。）買い物客もあれば、手にしたマニ車をくるくるとまわしながら、日本でいえば「南無阿弥陀仏」にあたるような真言を唱えつつ行くお婆さんがいる。黒いドテラのような民族服だ。あるいは五体投地を一心に続ける敬虔な巡礼者たち。道端に座り込んでお経を唱える巡礼の僧たち。あるいは仏教音楽を演奏する巡礼僧たち。巡礼の僧たちには道行く人々から一角二角の布施が差し出されるのだけでも、僧たちのほとんどはあまりに年期の入った僧衣に身を包んでいるので、ほとんど物乞いと見分けがつかない。その脇には本物の物乞いらしく見えるポロをまとった子供たち。それらの人々をフレームに収めようとカメラやビデオを向ける外国人観光客たち。

八角街をぎっしりと埋めつくし、ゆっくりと右回りする人々の流れに流されるようにして、八角街をぐるっとひとまわり。大昭寺の入口に至る。

大昭寺前はちょっとした広場になっていて、巡礼を終えた人々やラサの市民たちが思い思いにくつろいでいる。入口の香炉では香木が然やされ、まるで煙突のように煙を吐き出している。入口から大昭寺の方に向かって一心に五体投地を繰り返す人々。

大昭寺は七世紀、吐蕃王国時代の創建。チベットを初めて統一したリンツェン・ガムポ王をしのいで、その王妃ティツンによって建立された。寺は西方、つまり王妃ティツンの故郷ネパールの方を向いている。またここには同じくリンツェン・ガムポ王に唐から嫁いだ文成公主が伝えたといわれる釈迦牟尼像が本尊として祀られている。

大昭寺の外観は、ラサの特に旧市街で見かけるチベット建築と同様に、割石と煉瓦を積み重ねて造られた壁は漆喰で白く塗られ、金色平屋根の二、三階建ての、しかし要塞のように巨大な建築だ。壁の上部、屋根付近は茶色く彩色され、これはポタラ宮と同様。ただポタラ宮は上方に向かってそびえているという印象なのに対して、大昭寺の方は垂直的な指向の少ない、むしろ水平的な印象を与える建築だ。

一心に五体投地を繰り返す人々の脇を走り抜けて、大昭寺の中に入っていく。薄暗い寺の内部にはバターの灯明の匂いが強く漂っている。床もバターの油でべとつき、また漂う空気もしつとりと濡れたような感じだ。おそらく蒸発したバターが漂い、寺の内部を少しずつ濡らしていくのだろう。バターの灯明は器に火の芯を立たせたものだ。器には溶けたヤクバターが液体になって満たされている。巡礼者たちを見ると、ビニールの袋に入れたバターを持ち歩いている。スプーンでバターを取り出し、「オム・マニ・ペメ・フム」という真言を唱えながら、灯明につき足していく。所々には大きな金色のマニ車が据えられている。ごろごろとマニ車を回しながら、適当に巡礼者たちについて歩いた。

デョカン（大昭寺の中心部）の内部にはいくつもの小さな堂（六畳くらいの広さ）が設けられていて、その内部には大小様々な仏像が据えられている。巡礼者たちに続いて入口を入っていく、左手の仏像から順番に参っていく。巡礼者たちは灯明にヤクバターをつぎ足し、一角二角札を供え（そのために彼らはあらかじめ小銭の札束を用意している）、仏像の足もとに額をあてながら真言を唱える。ヤクバターも札も用意していないかっただけども、彼らにならって仏像に額をあて、静かに手を合わせた。

巡礼はゆつくりと進んでいく。まるで先へ先へと進んでいくことが惜しいかのように。まるで祈りのこの時をいとおしみ、過ぎていくこの時のなごりを惜しむかのように。そして巡礼者たちの気持ちをうつされたかのように、僕もまたいつしか僕なりの仕方でするこの瞬間を味わっているのだった。

巡礼者たちの行列は遅々として、それでも確実に進んでいく。歓喜堂、無量光堂、薬師堂、観音堂、弥勒堂、ツォンカバ堂、オタン湖堂、そしてまた無量光堂。もつともチベット仏教にも仏像にも知識のない僕にはどれがどれだか区別はつかなかったけれども。

やがてひとときわ灯明が明るく輝いている釈迦堂に至り、行列の歩みはいっそう遅くなる。ここには本尊であり、文成公主が唐から伝えたといわれ、全チベット仏教徒の崇拜の的となっている釈迦牟尼像が祀られている。この釈迦牟尼像は金色の仏像で、目にもあざやかな装飾をまとうている。巡礼者たちはカターと呼ばれる薄い白布を像の肩や膝にかけ、額を膝につけるようにして祈る。

釈迦堂のあとにはさらに弥勒法輪堂、獅子吼堂、などいくつかの堂が続ぎ、それらをひととおりまわって、二階へ。そこにも十近くの堂があり、そのひとつひとつをまわって、さらに三階へ。と思つて小さな階段を上つていくと、どうやらそこは僧たちの住居になつていゝらしく、立入禁止ではないようだったけれども、そそくさと階段を下りた。

ヤクバターの灯明の匂いにいぶされているかのような大昭寺を抜け出て、ほつとひと息、香木の煙にいぶされているかのような大昭寺前の広場に出た。午後の日差しは厳しくとても暑かつたので、アイスを買つて食べた。自転車の荷台にボックスを置いて商売をするアイス屋さん。

建物の陰に腰を下ろして、ぼんやりと広場を眺めていた。行き交うチベット女性たちの半数くらいは民族服に身を包んでいる。赤黒い色や黒色のチュバと呼ばれるドテラのような民族衣裳で、丈はくるぶしまである。上は袖なしでチュバの下は様々な色の長袖ブラウス。スカートだけがチュバで、上はブラウスだけという人も多い。男性の多くは背広やワイシャツにズボン姿。女性のチュバは厚ぼつたい布でできているようで、この暑さによくもまあ平気なものだ、と僕は感心したのだった。

大昭寺前の広場からはラサの繁華街ともいふべき人民路が西に伸びていて、様々な商店で賑わっている。チベット色は急に薄れ、中国の小都市の繁華街という印象だ。途中で青年路と呼ばれる通りを南下し、ラサの南に沿ってながれるキチュ河の方に向かった。

キチュ河沿いの沿河路にはヂョカンへの巡礼を終えた人々が帰路につき姿があった。ゆつくりと西方に足取りを運ぶ人々。野宿のようにして土埃にまみれながら街路樹の下に座り込んでいる家族たち。あるいは道端に寝そべり動こうともしない者たち。からからと、手にしたマニ車を回しながら歩いていく老女。沿河路の所々には香木の炬が据えられていて、もくもくと白い煙を吐き出していた。情景にも人々の姿にも、巡礼を終えた

安堵と、そして祭のあとのような虚脱が感じられた。ここがチベットのラサであるという意識がなければ、それは避難民かホームレスたちの群れのようにも見える人々の姿だった。

そして僕はふと思いがた。空港バスでラサ近郊まで来たときに目にしたのは、早々に巡礼を終えた人たちの姿だったのだと。ピクニックにしては続々と人が続くし、人々の歩いていく方向には何も無いように僕には感じられた。とても不思議な行列のように感じたのだったけれども。

沿河路をしばらく歩いていくと、やがてキチュ河の流れが目に入ってきた。それはとても美しい流れで、くつきりとした青い空やあざやかに白いちぎれ雲、そしてあくまでも黄土色の土くれと岩石だけの山々、その情景にとっても調和していた。中州にはまばらな木立と一面に淡く草が生えていた。

小石混じりの岸边に下りて、冷たい水で手を洗い、そのままふと歩き始めたら登ってしまえそうなほど目前にそびえる岩山を、煙草を吸いながらぼんやりと眺めていた。

ふと我に帰ると、二、三人ほどの小学生くらいの少年たちが何かを僕にしゃべりかけている。言葉は分からないのだけれども、さかんに身振りをまじえて訴えかけてくる姿を見ると、どうやら煙草をくれと言っているらしい。小学生くらいの子供が煙草を吸ってもいいものかどうかしばらく躊躇していたのだけれども、あまりにしつこいので、チベット人は子供でも煙草を吸うのかなと勝手に解釈して二、三本をあげた。するとそれまで岸边で遊んでいた子供たちがそれを見て、

「僕も、僕も」

「煙草、煙草」というように群がってきた。しかし、やはり煙草はまずいのではないかと僕は思い返し、飛行機の中でもらったピーナッツや飴があったので、それをあげた。子供たちのみんなに行き渡るほどはなかったで、

「はい。もう終わり！」と言いながら川辺を離れた。子どもたちはいろんなものを欲しがるのだけれども、だめ、と言うと決して取ろうとはしないし、カメラやボールペンにも手を出さない。見かけない変な外国人を相手にじゃれついていただけなのかもしれない。

キチュ河を離れてホテルの方に向かって歩き始めると、すこしずつ体調が悪くなっているのに気がついた。気のせいかもしれないけれども、身体がだるく、また頭の中のどこか遠いところから微かな頭痛が兆しているという気がしたのだった。

高山病のことが頭にあったので、努めてゆっくりと歩き、深い呼吸を心

がけながら小一時間ほどかけてヤクホテルへと戻った。

ベッドに腰を下ろしてしばらく休憩したあと、ホテルの隣の食堂へ。そこは外国人観光客の多いホテルの隣の食堂というだけあって、英語のメニューも置いてあった。蛋炒飯と青椒肉絲を注文。あまり食欲がなくてしんどかったけれども、食べておかなければと思ってちよつと無理をして食べた。

ヤクホテルの門の前に座り込んで、夕暮れの情景を眺めていた。門の前にはチェンジマネーを呼びかけるチベット人たちがいて、外国人が通りかかるたびに声をかける。無視をして歩き続ける外国人。たまにチェンジマネーに応じる外国人が現れると、チベット人は急に元気になって外国人を建物の陰につれていく。歩道を歩いてくる西洋人の姿を見るたびに、僕は、

「カモが来た、カモだ」

と小さく呟いていた。まるでチベット人の闇面替屋にでもなったような気分です。

そのようにして僕は、少しずつしかし確実に近づいてくる高山病の兆候、頭痛と身体のだるさを意識から遠ざけようとしていたのかもしれない。しかし高山病はやって来る。人によって重い軽いはあるし、陸路で時間をかけて来る場合と飛行機で一足飛びに来る場合の違いはあるにせよ、それは必ずやって来るし、そこを誰しも通らないわけにはいかないのだ。そしてやがて通り抜けたときには、あれほど不可思議な光景だと感じられたチベットの山々や、一心に五体投地を繰り返す人々の祈りが、少しは身近なものとして感じられるようになっていくはず…。